

日光修験と偽書の成立

大和久 震 平

A study of Relationship between Nikko Shugen and A False Biography

Shimpei Ohwaku

Mt. Nantai in Nikko, Tochigi Pref. has been famous for being an object of faith since before Nara period. On the basis of this faith, the Nikko Shugendo - a religious body, whose activity was to take ascetic exercise only in mountains - was organised in Kamakura period. Shugendo is a religion peculiar to Japan, which is founded on Buddhism, Taoism and other thoughts.

The Nikko Shugendo sought its origin to St. Shodo who was the first Buddhist climbed to the top of Mt. Nantai in Nara period, and it laid down the way of exercises or manners based on St. Shodo's biography "Hodarasan Konryuu Shugyo Nikki".

Although it is recorded that this biography was written in early time of Heian period, it was written in Kamakura period in fact and a lot of incorrectness about St. Shodo's career or behavior was told. Therefore it is totally useless as a historical record.

My study does not show the proof of incorrectness, but mentions the reason why this biography was needed in Kamakura period. By studied actual way of exercise in mountains and St. Shodo's real life, I concluded that the biography had been written as a principle for organizing Nikko Shugendo as a religious body, and for that some untruths were required.

はじめに

観光地として内外に知られる日光は、古代からの信仰の山である男体山の山岳信仰を基盤に発展してきたもので、長い信仰の歴史をもち、一山は盛衰を重ねて今日に至った。男体山は仏教渡来以前から信仰の山であり、奈良時代には補陀洛観音浄土に擬せられて補陀洛山ふだらくざんと呼ばれていた。「延喜式」「神祇十・神名下」には二荒山、「廻国雑記」には黒髪山とある。標高2,484.4¹⁾mの成層火

山で、日光山地の主峰である。古代には下野一國を表象する山であり、この山を神体山として祀る二荒山神社は下野国唯一の式内大社として幾たびの進階叙勲を受けた。男体山は東国有数の霊山として厚く信仰され、関東鎮護の山として鎌倉幕府・江戸幕府から尊崇を受けた。日光の地に徳川家康の霊廟である東照宮が造営されたのも、死後なお東辺を守ろうとした家康の遺言によるものとされる。日光の歴史は男体山に始るといっても決して過言ではない。

日光山の縁起については後世に作られた『日光山並当社縁起』があるが、これは各山各社の縁起文と同じくこのままでは歴史の史料にならない物語りで、別途の研究が必要である。これとは別に多くは縁起と題されていないが、縁起文とみなしてよい幾つかの記録がある。大部分が平安時代前期の年記をもち、撰述者の名も明らかである。列举すると『遍照発揮性靈集』の「沙門勝道歴山水瑩玄珠碑」、『補陀洛山建立修行日記』、『日光山滝尾建立草創日記』、『円仁和尚入当山記』、『二荒山千部会縁起』、『満願寺三月会日記』、『中禅寺私記』、『三月会縁起』の8編である。以上のうち『中禅寺私記』は平安時代後期の作、『三月会縁起』は年記がない。8編のなかで真撰は「沙門勝道歴山水瑩玄珠碑」と『中禅寺私記』の2編のみで、他の6編は偽撰とされ、偽書の成立は鎌倉時代以後と考えられている。

古代からの山岳信仰の霊山には奈良時代の山林仏徒の系統を引く修行者が住し、彼らはのちに修験道に組織された。修験道は我が国古来の山岳信仰と仏教・道教その他大陸渡来の信仰や思想とが習合した山岳宗教であって、仏教に依拠した形態を備えた日本独自の宗教とされている。各地には霊山が多く、これらは地方修験として次第に組織されてゆく。日光の場合も例外でなく、日光修験は男体山信仰を基盤にして鎌倉時代に教団の組織が完成したものである。

修験は山中修行によって体得された験により民衆を救済する現世利益に本旨があり、教団が成立してからは、山中の修行は集団で実施されるようになった。これを入峰・峰行・峰入りなどといい、地方によって異なるが原則的には春夏秋冬の四季の入峰があった。過酷な峰中修行を体得したものでなければ修験者の資格はあたえられず、この為にも、また対外的にも修行の由来を説く必要があった。後世の作であるが『木葉衣』、『金峰山秘密伝』、『修験秘記略解』、『役行者本記』等々修験道

の教義書・史伝書には、祖とされる役小角の事蹟が誇張修飾して書かれている。日光修験もまた峰行の祖を男体山開山の勝道に擬し、既述の縁起文のうち『補陀洛山建立修行日記』に依拠して入峰の大法が作られた。

先述の通りこの日記は勝道の同時代史料ではなく、鎌倉時代に書かれた偽書であり、古代史の史料としては価値がない。偽撰であることの論証については先学の業績があり、改めて触れる必要はない。偽書は偽書として、本稿では日光一山で偽撰がなぜ必要であったのか、日記偽撰の時期はおおよそいつごろか、またこれから派生する四季の峰行の成立順序はどうなるか、といった偽書の成立にかかわるいくつかの問題を、真撰の史料との比較と山岳信仰に関係する遺跡・遺物の検討を通じて考察してみようと思う。

I. 男体山の古代にかかわる文献

観音浄土の聖地と考えられ補陀洛山とよばれた男体山は、垂迹思想によって山神である二荒山神の本地が十一面観音、垂迹は大己貴命とされた。神社は名神祭に列する大社で『日本三代実録』貞観11年(869)2月28日の条に、正二位勳四等の神階が記されている。勳位は下野国の民の蝦夷征討における苦闘・勳功に対して、一国の神として叙勳されたものと考えられている。男体山開山の沙門勝道が開基したと伝える寺は名称が変転し、時代によって本坊の移動をみたが、日光山輪王寺として今日まで法灯を伝えている。勝道は華嚴宗の僧という見解があるが、正確なことは分らない。南都六宗のいずれかに属していたものであろうが、彼の死後そう間をおかず天台宗に変わり、今日まで天台宗の寺院であり続けてきた。

こうした一山の歴史は、下野国芳賀郡の人沙門勝道の男体山開山によって幕が開かれる。真撰偽撰の問題は措いて、まず前記した8編の内容をこ

くかい摘んで紹介しておきたい。

1. 「沙門勝道歴山水瑩玄珠碑并序」

(以下「二荒山碑」・「山碑」と略す)

山林修行者であった勝道が苦闘の末、天応2年(872)に男体山の登頂に成功し、中腹にある中禅寺湖のほとりに神宮寺を建立して山中の道場とした。功により彼は上野国講師に補任され、弘仁5年(814)頃没した。生前下野国学の師伊博士を通じて空海に開山の碑文の撰文を依頼しており、空海がこれを受諾して碑文を撰述した。四六駢儷体のすこぶる難解な詩文で、修辞が多いため未消化のまま後世に誤用された箇所がかなりある。

弘仁5年8月30日 空海撰。

2. 「補陀洛山建立修行日記」

(以下「補陀洛山日記」・「日記」と略す)

勝道の弟子という仁朝ら4人が、師の伝記をまとめたという形のもので、勝道の一周忌の弘仁9年(818)に完成させたと奥書にある。鎌倉時代に下る偽撰で、仁朝以下4名の弟子の名は「二荒山碑」になく、勝道の没年も違っている。本稿に取り上げるのはこの書で、「二荒山碑」と対比を行う。

弘仁9年2月 仁朝・道珍・教旻・道欽撰。

3. 「日光山滝尾建立草創日記」

(以下「滝尾日記」と略す)

勝道から碑文撰述の依頼を受けた空海が、弘仁11年(820)に日光へ来山して勝道の事蹟を訪ね、諸方に社殿・堂を建立する話して、滝尾では妙見の顕現にあい、妙見を祀る。「補陀洛山日記」の続編で空海下向の史料とされるが、鎌倉時代以後の偽撰である。

天長2年(825)4月3日 道珍撰。

4. 「二荒山千部会縁起」

(以下「千部会縁起」と略す)

日光山の千部会が勝道の弟子昌禅・尊鎮・尊蓮・仁朝らによって始められたことを述べるが、昌禅などの座主宣下が不明で、偽撰とされている。

時代は後世に下る。

天長5年(828)4月。

5. 「円仁和尙入当山記」

(以下「円仁入山記」と略す)

のちに比叡山の第3代座主となった円仁が日光へ来山して、山内や中禅寺湖畔に仏堂を建立し、諸仏を祀ったとする記録である。この書の重点はここにあるのではなく、円仁が勝道・空海の門流を集めて天台の門流に帰せしめたという部分にある。勝道とその弟子達は南都の法流に属していたものと思われるが、平安時代後期には確実に天台宗となっている。勝道は旧派仏教の人、「二荒山碑」撰文の空海は真言宗の開祖であるため、天台宗への帰属を架説する必要から、下野国出身の円仁に仮託したものと思われる。話しの順序からは「千部会縁起」に後行するが、鎌倉時代以後の偽撰とされている。

斉衡2年(855)正月 尊鎮撰。

6. 「満願寺三月会日記」

(以下「三月会日記」と略す)

勝道が建立したと「補陀洛山日記」にある四本竜寺で執行される三月会法会の縁起を述べたもので、文中に「菓子の変」の覆滅祈願に卓効のあった日光権現が正一位勲一等の極位に叙されたこと、日光の勝景を小野篁が撰述したことなど、架空の事蹟が述べてある。後世の偽撰である。

天安元年(857)閏6月 尊蓮撰。

7. 「中禅寺私記」

(以下「私記」と略す)

式部大輔藤原敦光の撰文になる日光山の縁起文で、一山の依頼により撰述したものと考えられている。敦光には加賀国白山の衆徒が依頼した開山泰澄の伝「白山上人縁起」があり、両縁起とも両山から送られた資料によって撰文された。原資料による粉飾はまぬかれがたく、文中には事実と考えられないふしもあるが、この縁起文は「二荒山碑」とともに日光の古代を知る根本史料である。

保延7年(1141)7月3日 藤原敦光撰。

8. 『三月会縁起』

この縁起文は勝道が男体山の初登頂を試みて失敗した神護景雲元年(767)を起点とし、369年余のあと撰文したことになっている。即ち平安時代末の成立ということになるが、確証はない。後世の作品であるかもしれない。勝道の登頂を三月会の淵源とするのであろうが、「三月会日記」では法会の起点を弘仁12年(821)としており、食い違いをみせている。

年記・撰者なし。

本稿が取り上げる偽撰の「補陀洛山日記」は、同じく偽撰の「滝尾日記」・「円仁入山記」の2編に継続し関連してゆく縁起文で、ひとつのセットとみればよいであろう。偽撰三部作とよべるかもしれない。「補陀洛山日記」には事実とはどうも考えられない滑稽な記事が多く、明白な誤りがあり、無学な者の悪筆という酷評もあるが、こうしたことは後世の縁起文に見られる通有の事柄で、それ自体はさまで気にすることではない。一般に偽書・偽文書というとそれだけで史料価値は無く、歴史の叙述から除外すべき性質のものとなる。しかし考えようによっては、偽書・偽文書を必要とする世界がそこにあり、真撰でないにもかかわらず長い生命を持ち続けていることもまた看過できない。偽撰であろうと無かろうと、これはひとつの歴史事実であり、歴史研究の対象に違いない。

II. 日光山地と修験行事の概要

1. 日光山地の地形

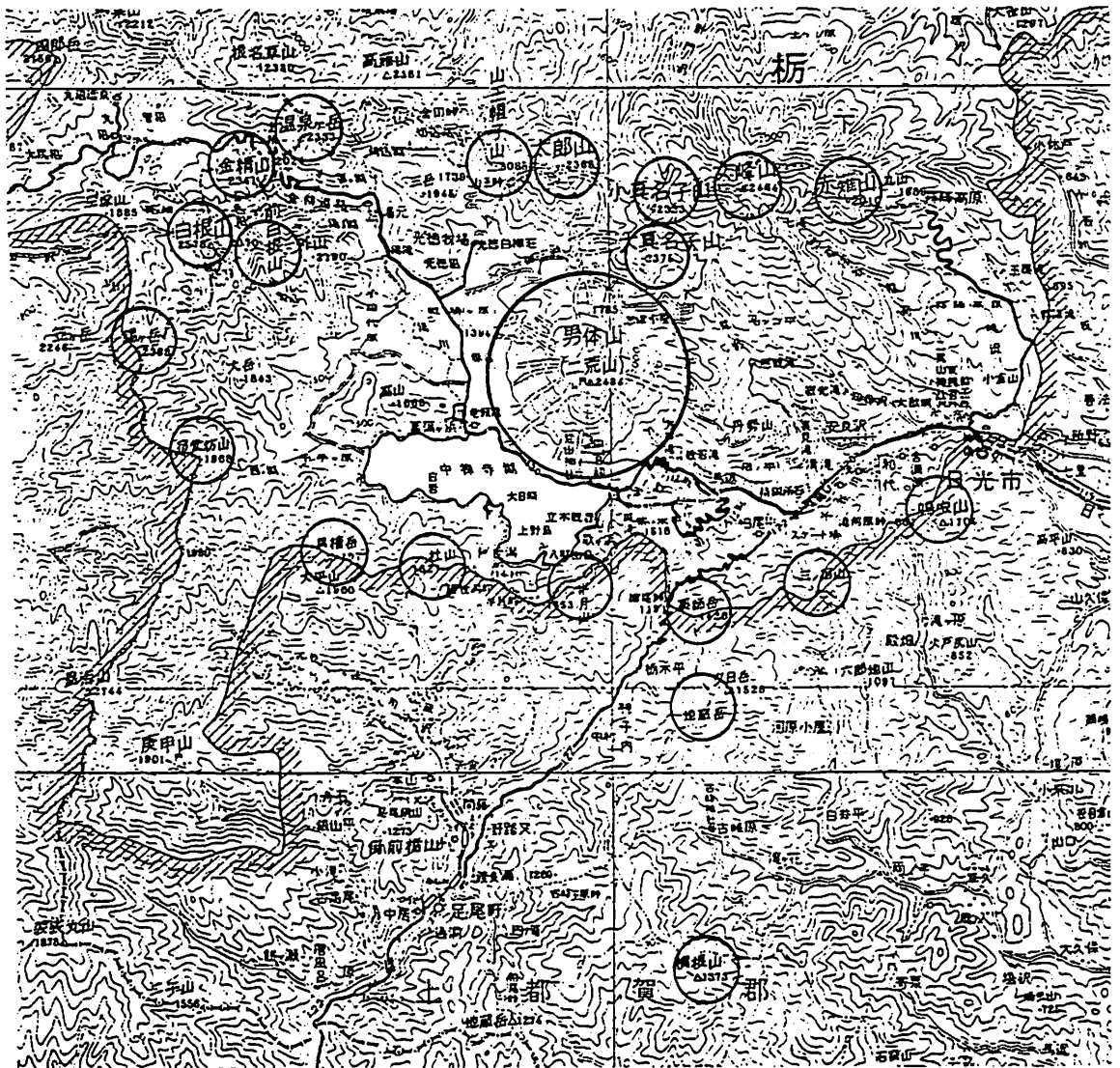
修験は山中修行が根本であり、山中修行を欠く修験はありえない。日光修験が道場とした日光山地はどのような地形であり、山地のどの部分で修行が行われたか、まず山地の様子を大観しておきたい。

日光山地の地形を述べるには種々の仕方があるが、本稿のように山岳信仰史を主眼とする場合には、地誌に従うよりも山地の中心にある中禅寺湖をまん中にして山列の配置を述べるのが適当であり、理解しやすいと思う。

第1図は中禅寺湖を中心とした山列を示している。日光山地と総称する山々で、中央にある中禅寺湖は面積が11.49平方㎏、湖面の標高は約1,200㍎、洪積世末の男体山噴火で大谷川が堰止められて生れた堰止め湖である。東西に細長い不整形で、東岸を除く3方は山が湖岸にせまり、砂浜の部分も狭隘で開発は進んでいない。中宮祠・中禅寺が造立され、諸堂が集中したのは湖の東部で、『中禅寺私記』にみる盛況は中宮地域のかつての繁栄を物語っている。

湖の北側に男体山を中心にして東西に並ぶ弧状の山列がある。これが表尾根と通称される日光火山群で、洪積世に噴出し、男体山と赤雉・女峰山が成層火山、他の山々は火口が不明の溶岩円頂丘である。山列の東端は標高2,010.3㍎の赤雉山、西端は2,577.6㍎の白根山で、白根山が火山群中の最高峰となっている。山体が最も大きく、火山らしい整美な姿をみせるのが標高2,484.4㍎の男体山で、山列から南へ突出し、平野部から偉容を望見することができる。同一火山体の赤雉山と女峰山は別として、その他の山々は独立した孤峰の感が強く、2,000㍎を越える難峰が揃っている。

中禅寺湖南岸に並ぶ山列は山体の形成が北側の山よりも古く、2,000㍎を越える山は錫ヶ岳だけで、東に向って標高が次第に下る。山列の東端は鳴虫山、西端は白根山の南々西に位置する錫ヶ岳で、列の東半分—茶の木平から鳴虫山の間は、日光山地より古い時代に形成された足尾山地の山々である。孤峰とよべるのは錫ヶ岳と隣りの宿堂坊山ぐらいで、その他は突出した山でなく尾根通りの高まりに過ぎない。古社の二荒山神社が神体山として祀る山は男体山のほか、赤雉山・女峰山・



第1図 日光・足尾山地主要山岳位置図

小真名子山・大真名子山・太郎山・金精山・前白根山・白根山の8峰で、これはみな北側の山列に属し、南側の山列には神体山がない。また三山信仰によって祀られた山は男体山・太郎山・女峰山の3山で、これも北側の山列の山である。

日光山地の主峰は男体山である。山体の規模が他山を圧して大きく、表尾根の前面に位置して低い足尾山地を前山にするため、平野からの眺望に恵まれている。平野の方向からみる山形は、古来

からの信仰の山に多い^{かんなび}神奈備型を呈し、低い山ではあるが同形の筑波山とともに、関東平野の東西に位置する霊山として、古代から民衆の信仰を集めていた。

2. 日光修験の行事

他山と同じように日光の場合も先修験的山岳信仰の歴史は古いが、日光修験として教団の組織ができ、或る程度の法式・儀礼が定まったのは、将

軍源実朝の護持僧であり日光山別当になった弁覺の事蹟などからみて、鎌倉時代に入ってからのことと思われる³⁾。このあと中世末まで日光修験は威勢を誇ったが、秀吉によって一山の山領が召し上げられて修験も衰頹した。近世に入り東照宮造営によって復活した修験行事は本来の^{とせう}斗数性を失って、幕府支配の日光山行事に組み込まれた。明治維新は日光山に強烈な打撃を与え、政治的・宗教的権威が喪失すると修験の組織も瓦解して、修験道廃止の政策により全く退転し、今日まで復興していない。他山の修験と異なり、日光修験は幕府に直結した輪王寺門跡直支配の地位にあり、本山派・当山派に属さず独自の権威を誇ったが、今は強飯式などに残照を見るに過ぎない。

修験の山中修行は秘密の行であって俗人の目には触れず、まして見聞の記録は無い。山中における法の伝授は口伝で、たまたま先達の山中手控えが残されていても、これから判明するのは修行の順路や行事の経過に過ぎず、口伝の部分はロイと注されるのみで内容は一切不明である。退転した日光修験の記録は大方が散逸し、関係者の努力で集められた僅かな記録も近世が主体で、盛時であった中世のものは皆無に近い。ここではこれらの不十分な史料を用いて、日光修験の行事を略述してみようと思う。

修験の行事の大部分は集団入山修行で、これは入峰・峰行とよばれている。日光修験も同様であるが、このほかに下宮地域である山内の諸堂に奉仕する行があった。これらは専門職の修験だけに限られた修行であるが、このほかに凡俗が参加し修験が引率して実施する行事があり、禪頂とよばれた。これを分けて説明したい。

1) 修験の行事

① 入峰

冬・春・夏・秋の四季の峰に分れ、日程や規模を異にして入山する。四季のうち夏峰は中世末に廃絶し、近世ではついに復興しなかった。冬峰は

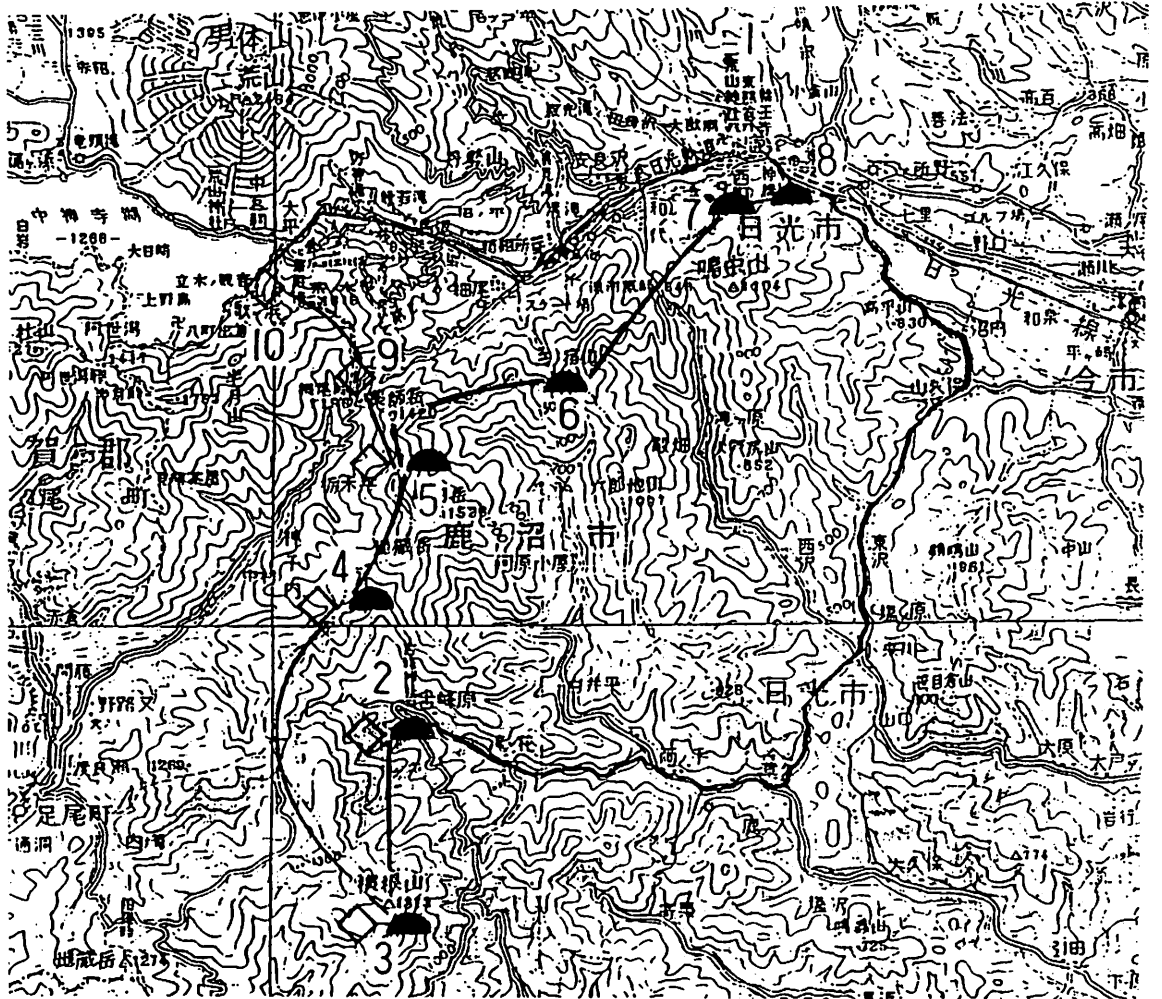
金剛界、春峰は胎藏界の修行で、ふたつの行事は継続して行われ、総称して両峰とよばれた。ただし順路における金剛界と胎藏界の区分は明確でない。春峰は最後に花を供える行事があるため華供^{けりく}峰とよび、四季の峰を三峰五禪頂^{さんぶごぜんちやう}と総称した。江戸幕府支配下の入峰は日光山内を起点とし、山内に戻る回峰の形をとるが、中世では日光からいったん^{いづる}出流（現栃木市）に向い、ここから入山することになっていた⁴⁾。これは本稿に関係の深い重要事項であるので、のちに詳しく触れる。

イ 冬峰) 師走も押し迫ってから入峰し、極寒を山中で過して春に出峰する。積雪のため修行は山中斗数よりも山中の宿での籠り修行が中心になり、順路は危険かつ登攀困難な日光山地の高嶺をさけ、中禅寺湖南東部の足尾山地の低い山々で行われた。

第2図の1-3-5-8-1の道筋が冬峰の順路で、横根山から入り、薬師岳・三宿山・鳴虫山と通過して山内に戻る。日程は12月上旬に山内に入峰山伏で対する饗応、同13~25日まで山内で前行、26日出立して古峰原に1泊、27日に山中に入り、深山宿・化莊宿・星ノ宿で長期の参籠を行い、3月2日に^{じんぜん}出峰し、翌3日に金剛送りを済ませて行事は終了する⁵⁾。山中を動き回らず一か所に籠る修行を「晦日山伏」といい、山中修行の古い形態とされている⁶⁾。冬峰は山中移動を含んでいる点からみて、古い形態の修行とその後が発達した新しい修行形態の混交といえるかもしれない。

ロ 春峰) 華供峰と通称される。他山でも用いられた名称で、行事もほぼ同じである。日光修験独特のものでなく、他山からの移入が考えられる行事かもしれない。

冬峰に引き続いて行われる修行で、冬峰の金剛送りの3月3日に大宿に集合し、行事が開始される。順路は第2図の1-3-5-10-1の道筋で、1-5までは冬峰と同じ道をたどり、薬師岳の手前で分れて中禅寺湖畔の歌ヶ浜宿に出、現在のイ



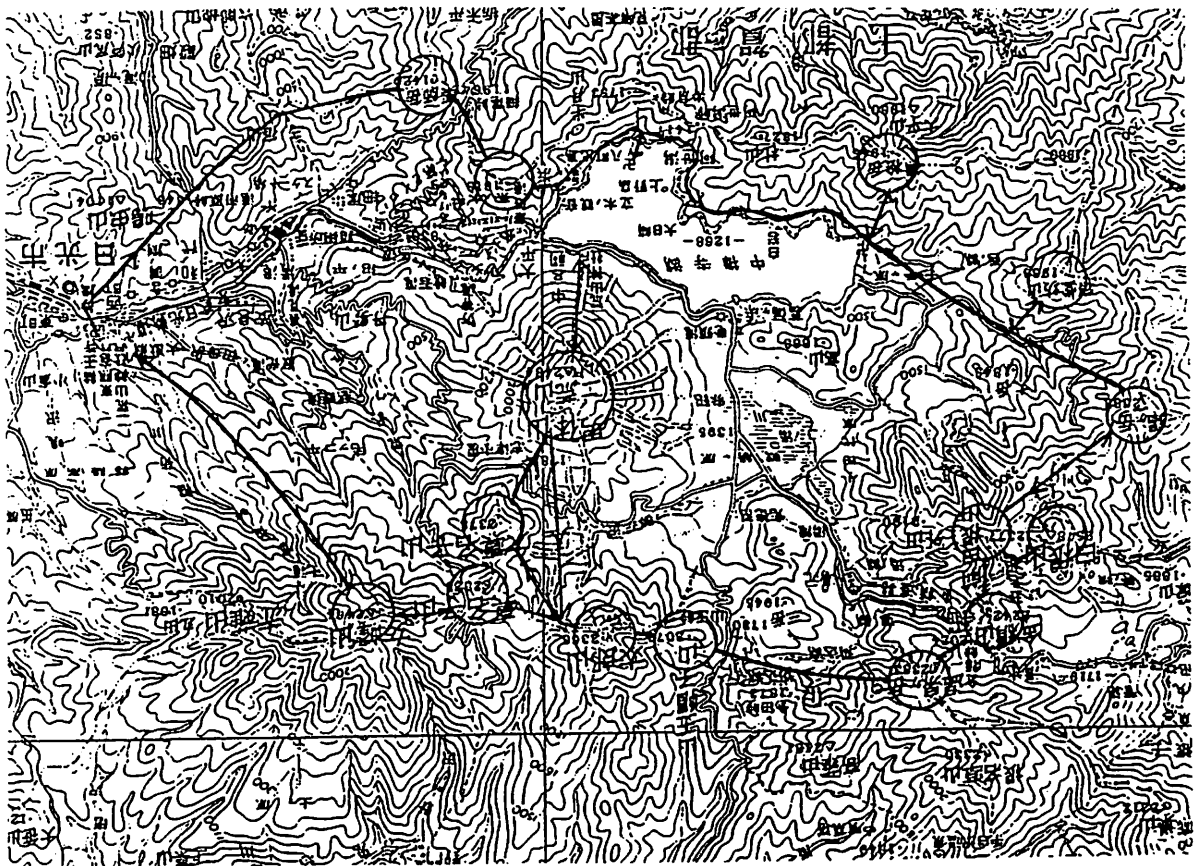
第2図 冬峰・華供峰順路図 ▲印冬峰 □印華供峰

口ハ坂を下って山内に戻る。日程は3月3～12日が前行, 13日に出立, 14日に横根山に入り, 深山宿・旧谷宿・歌ヶ浜宿で長期の籠り修行, 4月22日に中禅寺に花を供え, 下山して出峰となる。華供峰も冬峰と同じく籠り修行を主体としており, この修行で法が伝授される⁷⁾。

ハ 夏峰) 日光山地のほとんどの山を駆ける難行である。修験の料数性が極度に要求される苛酷な大行で, 犠牲者が出ることもあり, 中世末で廃絶した。宿の設営に多大の費用を要することも,

復活を阻害した原因と思われる。あるいは幕府の思惑が作用したかもしれないが, とにかくこの入峰には中世直接の史料がない。

夏峰は「順逆不二峰」ともいう。順峰・逆峰が一体の峰行という意味である。道筋は第3図に示した通り山内から出て華供峰の道を逆に入り, 中禅寺湖畔の歌ヶ浜宿から夏峰独自の道に駆け入る。これは南岸を迂回して錫ヶ岳から日光火山群の西端に取りつくもので, 途中黒桧岳・宿堂坊山を往復する。錫ヶ岳の山頂からは山稜を渡って前白根

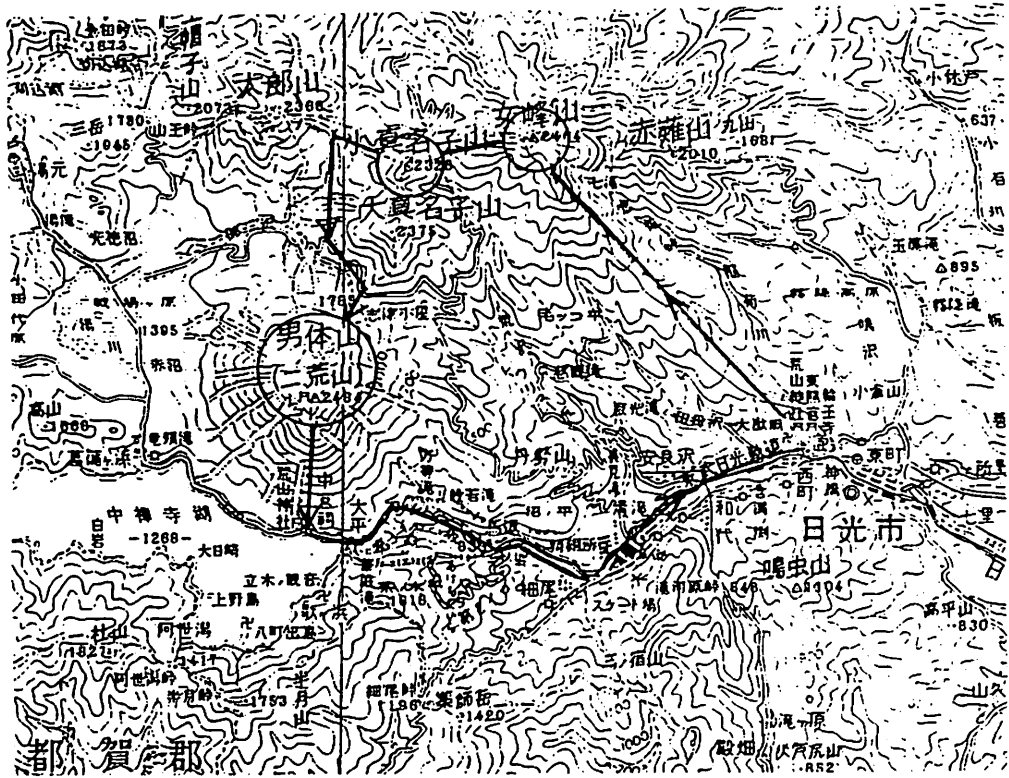


第3図 夏峰順路図

山に進み、白根山を往復して金精山・温泉ヶ岳・山王帽子山を通過し、男体山周囲の山にかかる。途中出入りがあるが、太郎山・小真名子山・大真名子山・男体山を駆け、女峰山を通して山を下り山内に戻る順路である。この縦走だけでも難行であるが、途中の行場や拜所で勤行があり、柴宿という野宿の数も多い。宿では定められた修行があり、峰行の眼目である灌頂が執行される。大峰の奥駆けに相当する重要な峰行であった。日程は5月12～29日まで前行、30日に入峰、山中の修行を経て7月14日に出峰となっていた。40余日を山中で過す大行である。途中冬・春峰と同様の籠り修行があり、古野宿では7日間の断食行、出峰直前の一の宿では9日間の修行が課せられた。夏峰も料敷と籠り修行を併用した修行で、単なる⁸⁾山中走

行の鍛練行ではなかったことが明らかである。

二 秋峰) 秋季の山中修行であるが、普通には五禅頂とよんでいる。入峰者の集団が1日置きに1番から5番まで5組入山したことから、このような名称になった。中世では5組であったが近世は3組に減じた。五禅頂の名称はそのままである。道筋は第4図に示した通り夏峰の順路を逆に入れて女峰山に出、西の稜線を下って小真山頂に登り、太郎山との間の鞍部から裏男体の道をつめて男体山頂に立ち、ここから下ってイロハ坂を通過し山内に戻る順路である。中世では女峰山から太郎山に登頂したが、近世では太郎山の山頂は略されている。日程は8月14～18日まで1番が前行を行い19日に入峰、22日に出峰する。以下1日ごとに1組ずつ入山してゆく。山伏の修行であるか



第4図 五禅頂順路図(近世)

ら峰中作法や勤行があり、定められた拝所に参詣するわけであるが、山中3泊と入山の期間が短かく、途中参籠り修行がない。この程度の峰行は山馴れた者ならば今でも容易な行程で、修行というより儀式臭が強い行事である⁹⁾。

② 大千度(遶堂)

修験が行う諸堂・神仏勤仕の遶堂修行で、比叡山の回峰に似ている。日光山は天台宗であるから、比叡山の修行形態が移入されたものであろう。勝道・空海・円仁によって加持されたという神社仏閣や自然物を拝礼して廻る修行で、勝道の弟子教曇によって弘仁年間に始められたということになっている¹⁰⁾。古くは3年間にわたって昼夜3回巡ることになっていたが、近世では年間を3区分にし、各1000回と定められた。この行の満願によ

て大先達職が授与されたが、大先達の号は本来夏峰を完遂した先達に与えられるもので、日光修験の科擧性喪失と幕府の宗教支配が強くにじみでている¹¹⁾。

修験関与の儀式として強飯式があり、今日まで輪王寺に伝えられている。日光社参の諸大名・富豪に大量の食事を強要するもので、東照宮鎮座の日光山の権威を支配者層に見せつける儀式である。政策臭が著しく強い。

2) 俗人参加の行

山伏が先達となり行人とよばれた凡俗を引率する集団行事で、入峰とはよばれず禅頂と称した。これには山頂登拝の男体禅頂・黒絵禅頂・白根禅頂と、中禅寺湖岸に点在する拝所を舟で回遊参拝する船禅頂があった。船禅頂は浜禅頂・補陀洛禅

頂ともよばれた。これらのうち最も重視されたのは男体禅頂で、日光山地における山岳信仰の原点であり、勝道開山以後今日の登拝祭まで連続されてきた基本行事である。湖畔の中宮祠から上は結界された聖地で、山頂へは定められた時期に、定められた潔斎を経て登ることが許された。古くは専門職のみの行であったが、次第に凡俗にも解放され、後に講が組織されるようになった。男体山の登頂のみを目的とする禅頂行の確実な資料は、男体山頂遺跡出土の禅頂札によって13世紀までさかのぼることができる¹²⁾。

男体禅頂の日取りや講の組織、および湖水の行である船禅頂については、本稿に直接関係がないため省略しておきたい。黒松禅頂は湖南の一山である黒松岳の登頂を目的としたもので、組織や順路・日程など不明のままである。この山は夏峰の順路になっているが、なぜ禅頂行の対象になったのか理由もわかっていない。白根禅頂も同様不明の点が多い。白根山は現在も小さな活動が繰り返される活火山で、有史以来かなりの数の噴火が記録されている。特に慶安2年(1649)8月の噴火はすさまじいもので、山頂が裂け堂社が谷底に転落した¹³⁾。この山頂は上野国との国境になっており、上野国側からの修行入山が行われ、遺跡も残っている。白根禅頂が下野・上野両国の凡俗が参加したものか、下野国側のみの行事であったのか、これも不明である。

以上が日光一山の修験が関係した行事の概要である。中世・近世の行事をまとめて表示するとつぎの通りになる。

第1表 日光修験行事表

専門山伏	修行	入峰	冬峰・華供峰・夏峰 ・五禅頂
		逸堂	大千度
	儀式		強飯式
凡俗参加 (行人)	禅頂	男体禅頂・黒松禅頂・白根 禅頂・船禅頂	

Ⅲ. 入峰の史料にみる勝道の事蹟

八王子千人同心組頭の植田孟縉が天保8年(1837)に上梓した『日光山誌』の「入峰禅頂」に、当時一般に信ぜられていた入峰の淵源に関する記事がある。所要の箇所を抜粋してみよう。

「開山上人当山を闢かせ給ふ時、初は出流山より分け入り給ひ、徒弟とともに多くの山嶽を攀ち、あまたの峻岨を陟り——からうじて当山開基の功業を終へ給へり。其後上人没後、十余輩の徒弟等、遥かに師の創業を追想し、また上人会て山川跋涉の砌、諸所に於てまのあたり影響の仏神を、各処に勧請し置き給へる事を相ともに恋慕渴仰し、打つどひ互に相語らひ、今より師の苦行の迹をふみ、師の勧請し給ひし仏神へ、年々無上の法施を奉らば、報恩謝徳の営これに過ぐべからず、天長地久の祈、上求下化の修行を、末代の法孫に伝へんも、また此大行に超ゆべからずと、おのおの大決心して、夫より入峰の修行を年々いとなむこととはなりぬとぞ。」¹⁴⁾

開山勝道は出流から山に入ってあまたの峰を越え、男体山を開いた。師の没後弟子達は遺徳を偲んで峰々を越えて行く入峰の法を定め、年ごとに取り行ってきたという大意である。

一山の有識者が古記録をまとめたとみられる『晃嶺古記集』のなかの「当山三峰五禅頂併往古之行事」には、これがやや詳しく載せてある。冬峰・華供峰について記載をみよう。

「古記にいう。道公(勝道)十余輩の遺弟に告げて曰く、吾此山を開基すること偏へに出流観音・明星天子・深沙大王の化度利生なり。故に出流より当山に攀躋し、高峰の所々において、現来したもふ諸尊をその霊場に勧請し奉り、十界修行を始め勧請の嶽々に登て供物を獻じ、難行苦行に法儀を成さば、其の功德至て広大にして、進んでは天下泰平、皇帝安穩、万民豊樂に、退ては末代入峰の行者此靈地に在て、ひとたび十界難行道の修

行を成さば、忽に三悪趣を離れ、生死を解脱し、^{とら}嶺に菩提を証せしこと疑い有るべからず云々。十有余弟、師の命を受けて各々相議し、春冬両季の修行に定むと云々。延暦年中より今に至って断絶せず。往古は毎歳春冬出流より分け入ると。中古以来深山より駆入って此法儀を修す。衆徒入峰の時には、往古の例に依て出流より入る。」

(原漢文)

勝道が出流より日光山に來り、諸岳で修法を行い、この行を遺訓として弟子達に伝えた。修行は平安時代初頭から今に至るまで継続し、中古では出流からの入峰が原則であったと要約される。中古とは中世のこと、諸岳とは冬峰・華供峰の説明であるから日光山地の高嶺でなく、足尾山地の諸山を指すものと考えてよい。上記ふたつの史料とも、勝道が出流から日光の地に入ったと説く。出流は前に触れた通り現在の栃木市の北西隅にあり、日光の中心部からほぼ真南に30里余、足尾山地の細い谷奥になった地域である。

日光修験の数少ない史料の中に、冬春両峰の伝承を略記した『両峰相承略伝記』がある。文中に天海の日光山座主職補任があるため近世の撰述が明らかであるが、両峰の縁起文はこれ以外になく、前述の『日光山志』『晃嶺古記集』が下敷きにしたと思われる部分があるので、一部を抜粋してみよう。

「補陀洛山師資相承之秘軌兩峰之大法は、^{どうじ}發時勝道上人明星天子之靈告により、道珍・教受らをひきて当国伊豆流（出流）より当山に攀渉の際、大剣峰に昇って五雲の^{あいたい}靈巖をみて勝境の奇特を知り——諸尊の降臨を靈地に感じ各処に草庵を設け“今兩峰攀路の地数処に現存する宿々は其遺跡なり”，念誦読経して以て斗薨（料撒）の苦行を積み、而て本山に入って更に本迹難思の尊容を拝し、予め現当の弘願を満たす。而て覚路を山林に残し、行軌を将来にたれたまへり。故に“古記に云う道公十余輩の遺弟に告げて云、吾此山を開基

すること実に伊豆流観音・明星天子・深沙大王の導引擁護に由る。故に各地の靈所において降臨の諸尊を勧請したてまつる。以来吾蹤依て練行すること有には則必ず二世の未願を満じと。茲因て十余弟、師命を受けて各々相議し、春冬両季に修行すと云々”，是此行法の権輿為り。」

(原漢文) 15)

勝道が出流より日光山地に入るに際し、手前の山々に草庵を設けて苦行を重ね、仏果によって男体山の登頂を成し遂げ、前段の苦行の跡を兩峰の大法として弟子達に遺託した、という大意で、『日光山誌』『晃嶺古記集』と同義が明瞭である。ではこれらの書が勝道の事蹟として述べている事柄、特に古記云々の遺戒などは、なにを典拠にしているのか確かめてみたい。換言するならば、日光修験による山中修行の拠り所となった古記の内容を確かめる作業で、当然のことながら偽撰と真撰の史料の対比という形になる。

IV. 「補陀洛山日記」と「二荒山碑」

1. 「補陀洛山日記」にみる勝道の山岳修行

「補陀洛山日記」の原文は漢文であるが、本稿は益田宗氏の訳読に従い、所要の箇所を抜粋する。本旨が勝道の山岳修行にあるため、これ以外の部分、例えば湖での面妖な話しなどは割愛しておきたい¹⁶⁾。

勝道の出自と出生の事情および彼の青少年期について「日記」は、「勝道上人は下野国芳賀郡の人なり。俗姓壘若田氏の人なり。——十一代活目彦狭茅帝（垂仁天皇）の第九王子卷向尊——事の因縁により東国に下向す。——遂に下野国の^{むろ}室の八島に住す。その三代の孫子は、大間城日邦——高藤介、藤系。上人は高藤介の子息なり。母は吉田連氏仁なり。時に、高藤介一子もなきを歎けり。当国中の伊豆留の岩屋に千手の靈像あり。——高藤介、婦妻と俱に靈像に詣でて、

子を儲けんと祈る。—— 巳にして幾日を経すして懐胎し畢んぬ。天平七年（735）亥四月二十一日、日中に産生する所なり。—— 童名を藤系と号す。—— 天平十三年（741）辛巳九月十一日、生年七歳、香花を備へて天道に供するに、夜中、神童来りて言ふ、吾、是、天上の聖衆の明星天子なり。汝は仏法を興行すべきものなり。故に汝に無師の智を授けん。—— ついに天平勝宝六年（754）甲午、行年二十歳の時、夜中住所を逃げ脱せしめて、伊豆留の岩屋に到り、偷に千手観音を念ひ、並びに三帰四弘法を誦す。—— 四ヶ年の春秋を送り已んぬ。天平宝字元年（757）丁酉十一月四日の夜、夢に北方を顧みるに大山あり。其の上に大剣あり。其の長さ三尺ばかり。夢吾めて異快極りなし。—— 北の山に向ひて尋ぬるに、白雲深々として進歩するあたはず。—— 既にして深洞に入れば夢見し所の如し。—— ここに住して三ヶ年を送る。同五年（761）辛丑正月二十一日、勅使あり。当国大山郷に薬師寺の戒壇を立てらる。聖人、好み悦びて庵を出て、彼の寺に到るに、たちまち鑑真和尚の弟子如意僧都と唐人惠雲律師に見ゆるに、善哉善哉と称す。—— 同六年（762）壬寅七月十五日、当寺において具足戒を受け、—— 寺に住すること、五年。」と記す。

即ち勝道は下野国芳賀郡若田氏の出で、垂仁天皇の後裔、父は高藤介、母は吉田連氏仁、父母出流観音に参籠して懐胎、天平7年4月21日に誕生。7歳の時明星天子の夢告を受け、20歳で出流に参籠し日光に近い大剣峰（横根山）で修行、4年間で出流に帰る。天平宝字5年受戒のため下野薬師寺に入り、翌6年具足戒を受けた、という大意になる。

受戒以後の山岳修行と補陀洛山開山については「天平神護元年（765）乙巳九月下旬、行年三十一歳、寺を出で帰りて大剣の峰に到る。同二年（766）丙午三月中旬、嶺頂に上りて四方を顧れば、北の山に当りて四色の雲、常に空中にそびえ

たり。奇異の思をなし、経像を縫負し装を裂きて足を纏ひ、北方に向ひて尋ね求め、終に当山麓に至る。一大河あり。—— すなわち宿念を遂げ草庵を結びて勤行す。—— 上人嶺上に登りて見れば、先の言の如し。—— この所において千手像を造り、堂を建て四本竜寺と号し奉る。神護景雲元年（767）丁未四月十日、山頂を見んと欲し、精進すること一七日、巳にして山頂を指して攀じ隣り給ふ。去ること四十里ばかりにして、嶽の半腹に一大湖あり。—— 深雪は凱々とし雷吼振動して、更に上ることをえず。又半腹より返り降りて、湖宿に住すること三七日、同五月十三日、本竜寺に還りて十四ヶ年の星霜を送れり。又、天応元年（781）四月、山頂に登らんと欲すれど—— 上る事をえず。同二年（782）壬戌三月中、道珍・勝尊・教旻・仁朝らを引率して湖宿に至り、精勤修行すること一七日。山頂に到るをえたり。四方を顧みれば、靈瑞胆に銘じ心神健朗にして言語に及び難し。三ヶ日を経て湖宿に降りて庵室を結び、礼懺勤修すること三七日、事おわりて本竜寺に返れり。」としている。

受戒ののち下野薬師寺から大剣峰に帰った勝道は、北方の瑞雲を見て奇異に感じ、山中を涉って補陀洛山麓、のちの日光に足を踏み入れる。ここに草庵を結び、やや高い稜線に四本竜寺を造立した。神護景雲元年に補陀洛山の登頂を試み、中腹にある中禅寺湖を発見し、この北岸を登頂の基地とした。この年の登頂は風雪のため失敗し、四本竜寺に戻って14年間の修行に明け暮れた。天応元年の登頂にも失敗した勝道は、翌2年道珍ら4名を従えて第3回目の登頂を試み、中禅寺湖畔で参籠ののち登頂に成功した。山頂で3日間の修行を行い、下山して四本竜寺に立ち帰った、という大意である。「日記」には初登頂の際の山頂の景観や、山頂からの展望が全く記されていない。「山碑」と比較するうえでの重点になる事項で、登頂路の問題とも関連する。

補陀洛山の登頂を果した勝道は中禅寺湖畔での修行を重ね、のちに上野国講師に抜擢される。開山以後の勝道について「日記」は「延暦三年（784）三月二十一日、中禅寺湖に参詣し、道珍らと相語らひて船を造り、湖に掉して遊覧せり。まず南湖に住み、後に北涯に栖して、香花を供し修行す。——五月二日、道珍らと相議して神宮精舎を建て、中禅寺と号し、丈六の立木千手観音を安立し奉る。側に社殿を造り、権現を崇敬し奉りて、四ヶ年を経たり。延暦七年（788）戊辰四月、北涯に住し修行す。同五月上旬、南涯に移り庵を結び勤修すること一七日、峰の上に大日輪あるを夢る。その中に五大尊住せり。——五大尊像を造立し堂を建てたり。柏原天皇（桓武）、遙かにこの由を聞いて叡感あり、延暦八年（789）己巳四月四日を以て、勅裁を蒙りて上野国総講師に補任せしむ。これによりてこの島を上野島と名づく。——大同二年（807）丁亥夏、東国旱魃、青苗ことごとく枯乾せし時に、下野国司利達上人に属し奉りて雨を請はしむ。しかる間、上人、山頂に上りて祈請し、——時に応じて甘雨霖々たり。——しかる間、毎歳四月二十一日、弟子と俱に往きて中禅寺に詣で、法施を捧げ勤行を致して朝家を祈る。——また四本竜寺において権現を勧請し奉り、膳供を備へ法味を捧げて、朝夕怠らず帰敬し奉りて、朝家並びに国のことを祈ると云々。また、河の南涯に当たりて嶺山あり、精進峰と名づけ、神を崇めて星御前と号せり。——また、河の北涯に深沙大王を崇めたり。この山は、あわせてこの二神の与力なり。」と記している。

勝道は延暦3年に道珍らと舟で湖をめぐり、湖畔に神宮精舎を建立して中禅寺と称し、側に権現の社殿を建てた。中禅寺で4年間の修行ののち、延暦7年4月に中禅寺湖の北岸に移り、5月に南岸に移動して五大尊堂を建立し、堂の前面にある小島にしばらく止住した。延暦8年に桓武天皇の御感により上野国総講師に補任、これにより勝道

の止住した小島を上野島とよぶことになった。大同2年東国の旱魃に際し、下野国司の要請により補陀洛山頂で祈雨の修法を行い、卓効があった。中禅寺・四本竜寺での勤行を毎年行い、河の南の峰に星御前、北に深沙大王を祀った、という大意である。講師は一国の仏寺・僧尼を管轄し経義を説く重責で、以前は国師と称し、延暦14年（795）に講師と改められたが、総講師という名称はない。また延暦8年の講師補任はありえない。この辺にも偽撰者の杜撰さが散見している。

勝道の入滅について「日記」は「上人、恒例山の頂に登らんがため、弘仁七年（816）丙申四月をもって中禅寺に詣で、二七日夜念誦読経せり。——忽然として化神出来せり。——化神曰く、——上人は明年春に入滅あるべし、対面今日を限りとならん、と。——同年八月四日、本竜寺の北方に去ること八九町、岩岨あり。離怖畏所と名づく。上人、かしこに至り入定の所と定めたり。同八年（817）丁酉二月二十五日夜半、十余人の弟子らに告げて曰く、“我、聖帝と深き契あり。朝恩により当寺を興隆し、権現の化導を仰ぎ奉れり。あへて遺失せしむることなかれ。——”語り已りて、三月一日、行年八十三、禪定に入るがごとくにして入滅し已ぬ。弘仁九年（818）戊戌二月日これを記す。仁朝 道珍 教受 道欽」とある。

勝道は弘仁7年4月、中禅寺参籠中に化神に会い、明年に入滅するという告知を受けた。8月に彼は四本竜寺北方の岩屋を入定の場所と定め、弘仁8年2月25日に弟子達へ遺言を伝え、3月1日に入滅した。行年83歳であった。一周忌の弘仁9年2月に、仁朝・道珍ら4名の弟子が集り、撰文したのがこの「日記」である、という大意である。

以上が『補陀洛山建立修行日記』のうち勝道の山岳修行の概要と、従ってまた彼の生涯の歩みの概略である。では真撰とされる「二荒山碑」の中で勝道がどのように取り扱われているか、上述の

項目に従って瞥見してみよう。

2. 「二荒山碑」による勝道の生涯と事蹟

「二荒山碑」正しくは「沙門勝道歴山水瑩玄珠碑并序」は極めて難解な詩文であることのほかに、空海撰文の真偽について面倒な問題が介在している。本稿では深入りを避け、新しい研究による釈読に従い、勝道の修行の跡を追ってみたい。

まず基本的な事項として、「二荒山碑」の真撰偽撰の問題を簡単に述べておく必要がある。学界には古くから偽撰説があり、藤井萬喜太氏が最も強固に主張していた。即ち碑文は空海の撰文ではなく後世の偽撰とするもので、論拠は空海の詩文集めた『性霊集』には後世の偽撰が混入しており、「山碑」もこのひとつとみられること、空海と勝道を仲介した下野国学の伊博士は古史に名を欠く疑問の人物であること、勝道の受戒は度牒が伝わらず事実と思われぬこと、上野国講師補任は正確な年記がないこと、上野国分寺には勝道赴任の伝がないこと、上野国中に勝道の事蹟がないことなどが主なもので、勝道は碑文に称えられるような求道の沙門でなく、山中を徘徊するシャーマンに過ぎないと極め付けた。碑文は偽撰で後人の捏造ということである¹⁷⁾。

こうした論証にもかかわらず、最近の学界は碑文を正撰と認める方向に動いている。益田宗氏は神護寺本「二荒山碑」一軸が空海の本筆ではないにせよ平安時代初期に筆写されたものであること、空海撰文とされるが事実上は偽撰の「高野四至敬白文」は「二荒山碑」を下敷にしており、偽撰は承暦3年(1079)以前で、この頃すでに「二荒山碑」は空海撰と認められていたこと、勝道の碑文撰文の依頼を空海に取り次いだ伊博士は空海と大学を共にした実在の人物であること、空海の日光来山は虚構であるが下野国司や下野大慈寺の広智あて書状の存在から、空海は下野国に対するかなりの認識をもち、勝道についても知るところがあった

のではないかと推測できることなどをあげ、「二荒山碑」は空海真撰と結論しておられる¹⁸⁾。本稿は益田宗氏の研究を参照し、碑文の細部も同氏の見解に沿い、必要な部分の抜粋をしてゆく。釈読も同氏の論文に従う。碑文の原文は漢文で、しかも修辞が非常に多いため、漢字にこだわることなく仮名書きにした部分がある。

勝道の出自と青少年時代について「山碑」は「沙門勝道といへるあり。下野芳賀の人なり。俗姓は若田氏。たましい、救蟻の齡にはるかにして、こころ、借囊のとしに清し。四民の生事に桎梏せられて、三諦の滅業に調飢せり。聚落の轟々たるを厭ひて、林泉の皓然たるを仰げり」と説明する。修行僧勝道は下野国芳賀郡の人で、若田氏出身。少年になりきらないうちから人々を救うために出家を志して見習となり、20歳で受戒した。世間の煩雑を避け仏教の真理を悟るため、村里を離れて山林・泉水の修行を思い立った、という大意である。

具体的な山林修行について「ここに同じき州に補陀洛山あり。そう嶺銀漢をさしはさみ、白峰碧落を衝けり。——借問す、古より未だ攀ちのぼる者有らざるか、と。」と簡明に補陀洛山を修行の場を選択した理由が述べてある。補陀洛山は前人未踏の山であった。

補陀洛山の登頂については「遂に去りぬる神護景雲元年(767)四月上旬を以てふみのぼれども、雪深く巖峻しくして雲霧雷迷して上ること能はざるなり。還りて半腹に住すること三七日にして却き還れり。又、天応元年(781)四月上旬、更に攀陟を事とするも、亦上ることをえざるなり。二年(782)三月中、諸の神祇のおおんために経を写し仏を図し、裳を裂いて足をつつみ、命を棄てて道をもとむ。経像を強負して山の麓に至り、経を読み仏を礼すること一七日夜、堅く誓を發して曰く、——我、若し山頂に到らずば、菩提には至るまじ。是の如く発願しおわって、皇雪の皚皚

たるを踏み、緑葉のさいさいたるを攀^よづ。脚踏むこと一半にして、身疲れ力つきぬ。憩い息むこと信宿^{しんしゆく}にして、ついに具の頂を見る。」と登頂は3回目^{さん}で成功したと述べている。第3回目は前2回と異なり、途中2泊の休息をとっている。近代登山術でいう極地法によったらしく、これが登頂成功の因をなしたように思われる。

山頂の様子や上からの眺望を「山の状たるや、東西は竜の臥せたるがごとく、わたし望むに極^{きわ}りなし。南北は虎の踞^{うづくま}るがごとく、棲息するに興あり。——北に望めば湖あり、約計ふれば一^{ひゃく}頃なり。東西に狭く南北に長し。西を顧みれば一小湖あり。二十余頃あるべし。坤をかへりみれば更に一大湖あり。こめて計ふれば一千余町なり。東西に闊^{ひろ}からず南北に長く遠し。四面の高き峰影を水中に倒^{さか}す。——我、蝸庵を其の坤角に結むで、之に住し礼懺することややもすれば三七日を経たり。己にしてこの願を遂げ、すなわち故居に帰る。」と記している。山頂は火口壁で、東西は凹凸があるものの比較的平坦、南北は溶岩塊が重なって火口壁に大きな落差がある。碑文はこの景観を正しく簡明に表現している。湖の情景描写は山頂の描写よりもはるかに詳しいが、この部分は省略した。勝道が山頂の南西角に小屋掛けをし、21日間ここに止住して修法を行ったことは、登頂行が単なる山頂征服でなく、山頂での修法が本来の目的であったと理解される。常人では真似のできない高所での籠り修行・修法に、登頂の本願があると考えてよい。

開山以後の勝道は南湖（中禅寺湖）の湖畔を修行の道場に定め、湖を広く探索し、神宮寺を建立し、幽玄な山水に囲まれて修行に明け暮れた。この間に地方の寺院を建立し、補陀洛山頂で祈雨の修法を行い、上野国講師にも補任された。碑文は「去んぬる延暦三年（784）三月下旬、更に上って五箇日を経て、かの南湖の辺に至る。四月上旬に、一小船、の長さ二丈、広さ三尺なるを造りえ

たり。即ち二三子と与に湖に棹して遊覧す。——また、更に西湖に遊ぶ。東の湖を去ること十五許里。又南湖を覽れば南を去ること三十許里、並びに美を尽すといへども、すべて南には如かず。其れ南湖は則ち碧水澄鏡のごとく、深さ測るべからず。——此の勝地について聊か伽藍を建つ。名づけて神宮寺と曰ふ。此に住して道を修め、荏苒^{じんぜん}として四祀なり。七年（788）四月、更に北涯に移住す。四望さわりなく、沙場は愛しつべし。——去りぬる延暦中、柏原皇帝（桓武天皇）、之を聞しめして、便ち上野国の講師に任ずるに、利他時あり。——又、華嚴の精舎を都賀郡城山に建立す。——去んぬる大同二年（807）、国に陽九あり。州司、法師をして雨を祈らしむ。師、補陀洛山に上って祈禱す。時に応じ甘雨霽^{はうはい}して、百穀豊登なり。」と述べる。天応2年の開山以後、大同2年の祈雨に至るまでの経過は「補陀洛山日記」と大すじで変りないが、「日記」には延暦3年の補陀洛山登頂と、年記を欠く都賀郡城山の華嚴寺建立が落ちている。城山は「倭名抄」の郷名にないが同じ都賀郡であり、そう遠隔の地ではなかったように思われる。

勝道の没年は碑文では明確を欠く。空海が勝道の依頼を受けて撰文を始めた頃、勝道は既にこの世を去っていた。このことは碑文に明記してあるが、修辞の多い難解な詩文であるため見過されることが多かった。「補陀洛山日記」が勝道の没年を弘仁8年としているのも、空海の詩文が読解できなかったためと考えるとよい。碑文は「ああ、日車駐^{とど}め難く、人間^{じんかん}変じ易し。従心^{じゆしん}は忽ち至りて、四蛇^{しよらい}虚^{しよゆう}嵐^{つと}せり。撰誘^{せんゆう}これ務めて能事^{ねいじ}畢^{おひ}る。」と書く。歳月の流れはとどめ難く、人の世は流転する。70歳の老齡が忽ち訪れ、身体が空しくなった。人を善導した一生は、すべて終わった、という大意である。

空海の撰文は碑文に「弘仁^{こうにん}の教^{しやう}祥^{しやう}の歳、月次^{つきなみ}は壮朔^{そうさく}、三十の癸酉なり」とあって、年記が明白で

ある。弘仁5年(814)8月30日の意で、「日記」の偽撰者はこれも読み取れなかったのではないかと思う。空海の撰文が弘仁5年8月として、勝道の没年はこれより少し前の弘仁4年か弘仁5年の初め頃とみれば、大過はないと思う。この頃を起点に生年を逆算してみると、およそ天平16年(744)前後が誕生の歳になる。聖武天皇が諸国分寺の建立を詔した天平13年(741)からほど遠くない頃で、天平16年11月には、のちに東大寺

に移される盧舎那仏の体骨柱が甲賀寺に建てられた。勝道はこの頃の生れの人で、「日記」にいう天平7年(735)の誕生は古きに失する。

偽撰の「補陀洛山日記」と正撰の「二荒山碑」を略述して、所々にその異同を示しておいた。勝道は天平16年頃の生れ、天平宝字8年頃受戒、没年は弘仁5年頃、行年は70歳前後ということになる。これを軸として、真偽両史料の異同をまとめたものが次表である。

第2表 「荒山碑」「補陀洛山日記」記事対比表

「二荒山碑」			「補陀洛山日記」		
項目	年記	事 蹟	年記	事 蹟	
出 自	年記なし	下野国芳賀郡若山氏の出	天 平 7 (735)	4・21誕生、下野国芳賀郡若山氏の出、垂仁天皇の後裔。父は高藤介、母は吉山連氏。父・母伊豆留に参籠して出生	
青少年期	年記なし	少年時代に出家、20歳で受戒	天平勝宝6 (754)	20歳で伊豆留に参籠	
			天平宝字元 (757)	日光に近い大剣峰で修行	
			同 4 (760)	伊豆留に帰る	
			同 5 (758)	下野薬師寺に入る	
			同 6 (759)	具足戒受戒	
山林修行	年記なし	林泉での修行を志し補陀洛山麓に移る	天平神慶元 (765)	下野薬師寺から大剣峰に帰る	
			同 2 (766)	補陀洛山麓に移り四本竜寺を建立	
補陀洛山登頂	神護景雲元 (767)	第1回登頂失敗、中腹で2日間修行	神護景雲元	第1回登頂失敗、中禅寺湖北岸を基地にする	
		以後14年間記録なし		以後14年間四本竜寺で修行	
	天 応 元 (781)	第2回登頂失敗	天 応 元	第2回登頂失敗	
	同 2 (782)	第3回登頂成功、山頂で21日間の修法。同行者記録なし、山頂の形・湖の景観を詳述	同 2	第3回登頂成功、道珍ら4名を従え中禅寺湖畔で7日間修行。山頂で3日修行、山頂・湖の記録なし	
開山以後	延 暦 3 (784)	第4回登頂、山頂で5日間修法。同行2・3人と北・西・南湖を踏査。南湖畔に神宮寺を建立し4年間止住	延 暦 3	登頂記録なし、道珍らと湖踏査、神宮寺を建立して中禅寺と称し側に権現の社殿を造立。中禅寺で4年間修行	
	延 暦 7 (788)	南湖の北岸に移動	延 暦 7	4月南湖の北岸に移動、5月南湖の南岸に移動、5大尊の堂を建立。堂の前の小島にしばらく止住	
	延暦年間	上野国講師補任、下野国都賀郡城山に華嚴寺を建立	延 暦 8 (789)	4月4日上野国総講師補任、南湖の小島を上野島とよぶ華嚴寺建立の記事なし	
	大 同 2 (807)	下野国下害に際し補陀洛山頂で祈雨の修法	大 同 2	夏東国下害に際し補陀洛山頂と江尻滝で修法	
入 滅		没年・入滅場所ともに不明、弘仁5年(814)8月以前に入滅と推定、行年70歳前後	弘 仁 8 (817)	弘仁7年(816)4月修行中に明年入滅の告知あり 3月1日四本竜寺北の岩〇で入滅、行年83歳	

3. 両記録における勝道事蹟の対比

ふたつの記録を比較した場合、「二荒山碑」は難解な詩文であるにもかかわらず、事実をあまり飾らずそのまま素直な形で述べてあるのが特色である。出生、受戒、補陀洛山登頂の願望と実践、湖水の景観、祈雨の修法など、どれを取り上げても美しい筆で事実が述べてあるだけで、事実を神仏や怪異に結びつけた粉飾はない。これに対し「補陀洛山日記」は勝道の事蹟を権威づけるためか、万事を勝道に仮託するためか、一々の事実に神仏の加護を引き出し無用な粉飾を加えてある。滑稽とも愚劣ともいえる過度の粉飾であって、信仰上の典拠とする以外、史料として使用できないとされる所以である。ただ史料として使えるか使えないかは視角と操作の問題になるが、これに入る前に表示に従い、項目別に相互の違いを確かめておきたい。

勝道の出自について「山碑」は芳賀郡若田氏出身とし、生年の年記を記さないが、「日記」は勝道の家系を飾るため皇統を持ち出し、出生秘話を作り上げる。ここで日光の山岳信仰と直接関係のない出流観音の信仰が述べられている点に、注意を向けておきたい。

青少年期について「山碑」は幼少の頃に出家、20歳で受戒と簡略に記すが、「日記」は出流の参籠、大剣峰での修行、下野薬師寺での受戒と止住を細かく述べる。出生の捏造をさらに粉飾する形である。

山林修行については「山碑」が人里を離れた林間や湖水での修行を志し、同国内の補陀洛山麓に移ったと簡単に記すが、「日記」は下野薬師寺から大剣峰へ、さらに大剣峰から補陀洛山麓へと迂回の道筋を示す。今日の大谷川を渡河して山内に入るのにも怪異の物語りがあり、山麓の尾根通りに四本竜寺を建立したことになる。「山碑」の記事で注意しておきたいことは、のちの男体山が勝道以前から観音浄土の補陀洛山とされていた

点である。山名は勝道の命名ではないと読み取れる。空海が下野国の補陀洛山を知っていたか、勝道から空海に届けられた資料にそうなっていたかのいずれかであろう。勝道建立という四本竜寺は「山碑」に見えない。この寺は日光修験の本拠であるから、勝道への仮託が当然考えられる。

補陀洛山への登頂行3回の年記は両者一致しているが、「日記」にある月日や従者までは「山碑」にない。登頂に関してふたつの記録の最も異なるところは、1回目と2回目のあいだの14年間の空白と湖発見の記述であり、さらにいえば山頂部の景観に関する記述である。14年間の空白を「日記」は四本竜寺止住と書くが、「山碑」は黙して語らない。山中修行の仏徒が一寺に長く住持するのは後世のことで、奈良時代の山林仏徒は料敷を旨とし、一カ所に定住することはあまりなかった。政府の記録に名を載せる同時代の箱根山の万巻がよい例である。勝道の場合もこの期間は、他国の山岳にまで及ぶ山中修行に専念していたのではないかと思う。益田宗氏によって勝道の出た芳賀郡の若田氏は、上野国の出自であった可能性が説かれ、¹⁸⁾彼自身がのちに上野国講師に補任されたうえ、赤城山開山も勝道と伝えられていることなどを勘案すると、勝道の上野山中料敷は考えられないことではない。

「山碑」にある山頂からの景観、特に湖の形状の叙述は、快晴の山頂に初めて立った者でなければ、知ることができない立体感をもっている。空海への資料がそうなっていた、と考えるほかはない。これに対し「日記」は、具体的な景観に全く触れていない。偽撰を行った鎌倉時代の修行者には、山頂の形状や湖の展望は茶飯事であって、改めて風景を述べ立てる必要はなかった。記述の欠落はこのためであろう。

この問題に関連して、補陀洛山登頂路に触れておく。南湖はのちに中禅寺湖とよばれるようになった大湖で、勝道がこよなく愛し、湖畔を修行の

道場と定めて移動し、止住した。

「山碑」に南湖その他の湖が出るのは、登頂成功時の山頂からの展望が初見である。しかし「日記」はそうっていない。神護景雲元年の第一回登頂失敗の時から、この南湖畔にとどまった形に書かれているわけである。この違いがどこから出たかという問題が、補陀洛山の登頂路に関係している。今日一般に用いられている道は山麓の日光山内から出てイロハ坂を上り、中禅寺湖畔に出て山頂に向う。イロハ坂を通る道は古くから用いられた中禅寺への表道で、峰入も帰途にはこの道を下っている。イロハ坂を通過して上るかぎり、必ず中禅寺湖へ出なければならぬ。山腹は大谷川の急河谷や^{なご}籬とよばれる大浸食谷が発達し、登山の道は物理的に狭い範囲に制限されている。「日記」はこの常用の山道を勝道もたどったものとして、疑うことなく書いたものであろう。とすれば、補陀洛山への登頂は初めから中禅寺湖のほりを通ることになり、これ以外の道はない。

補陀洛山頂から湖を初めて見下すとすれば、山の背面から火口壁に取りつく登頂路、裏男体とよばれている北斜面の道を進んだとしか考えられない。この道は山頂に到達するまで、山の南側に横たわる湖を見ることはできない。山麓の日光山内からは丹勢山を越え、東側の山腹を北に向って斜めに渡り、大真名子山との境にある志津に出て、裏側から山頂を目指すことになる。図上では他の道を模索することが可能であるが、実地は山腹を抉る浸食谷の発達がすさまじく、これを越えて進むのは不可能に近い。このような現状が奈良時代も同様であり、浸食谷の位置と状態が今日と大差ないとすれば、湖初見の問題は「山碑」の記述の正確さ、別の言葉でいえば記述の信憑性の問題になってくる。

しかしながら、この問題の正否を裏付ける同時代史料は全くない。結局は「二荒山碑」の解釈の問題になってしまうが、勝道が作成し空海に渡さ

れた資料に、このように書かれていたと考えるのが常道であろう。偽作の「滝尾日記」は弘仁11年（820）の空海来山を記すがこれは虚構で、空海が日光山に来山したことはない。従って山頂の様子も湖の景観もすべて空海自身の実見に基づく写実ではなく、勝道の資料をかなり忠実に追った詩文と考えなければならない。空海にとって、山頂に立たなければ見ることのできない湖を、登頂路によっては中腹で湖が望めると書くことはできなかったし、また書く必要もなかった。勝道の側にすれば、空海に送る資料に、湖発見の感激や景観の叙述に先後の誤りを犯すはずはなかった。「山碑」が正しい叙述を行っているとすれば、それは正確に書かれた勝道の資料によるものであり、勝道の資料に誤りがないとすれば、山頂に立たなければ湖を望めない登頂路は、山体の裏側の道しかないということである。

山頂での修法とこの期間のことは先に述べてあるので、ここでは再論を避ける。開山以後、勝道のとった行動は補陀洛山への登頂を繰り返すことではなく、大自然そのものの山中に自分が納得できる修行の道場を建てることであったと思われる。山中・湖水を探查の結果、中禅寺湖畔を選択し、ここに止住して修行に没入した。補陀洛山の山頂は山霊の鎮まるところであって、人の常住できる場所ではない。それは修法の場であって、道場建設の場ではない。山頂に立って湖を見下した瞬間から、勝道の念頭には道場の建設があったのではないかと思う。「山碑」は補陀洛山登頂に重点があるのではなく、湖畔に道場を建設したことに重点を置いて撰文されている。山体・山頂の様子よりも、湖の形態や景観に叙述の中心がある。山は開山すればそれで十分、あとは3つの湖の中から道場にふさわしい場所を選択するだけであった。

勝道によって神宮寺が建立され、彼の道場が造られた南湖——中禅寺湖は、彼の死後宗教上の霊地として非常な発展をとげた。この様子が日光一

山からの資料によって撰文された藤原敦光の『中禅寺私記』であり、これをなぞって粉飾したものが「補陀洛山日記」に見える湖水・湖畔の部分である。勝道の止住が上野国講師補任後か或いは南湖止住中か判然としないが、延暦年間に都賀郡城山に華嚴寺を建立している。しかしこの事は「山碑」にあって「日記」にはない。「日記」成立の鎌倉時代にはすでに退転しており、跡かたもなくなっていたのではないかと思う。今日下都賀郡都賀町の山中に華嚴寺跡と称される遺跡があるが、直接的な証拠資料はなにもない。「日記」撰文の頃には華嚴寺に関する情報が皆無で、これが華嚴寺欠落の原因であったと考える。

勝道の入滅に関し、「山碑」は入滅の年も場所も明示していない。行年も70歳前後と推定されるだけである。逆に「日記」は勝道入滅を仰々しく飾り立てる。弘仁7年の入滅告知から始まり、翌8年岩窟での入滅まで聖者入滅の物語りを書き綴る。もともと虚構の縁起文であるから、このような結末は頭初からの計算であったと考えてよい。

以上が「二荒山碑」と「補陀洛山日記」の対比によって明確となった相異点の大略で、この両者の間に藤原敦光の『中禅寺私記』を入れてみれば、「日記」偽撰の経過が更に詳細となる。しかしこれは本旨から離れてしまうため別稿にゆずり、対比した事項のうち「山碑」には全くなく、「日記」のみにあって、しかも日光修験に直接関係のある部分を取り上げて検討を加えてみたい。

V. 日光修験と出流山

1. 「補陀洛山日記」にみえる出流山

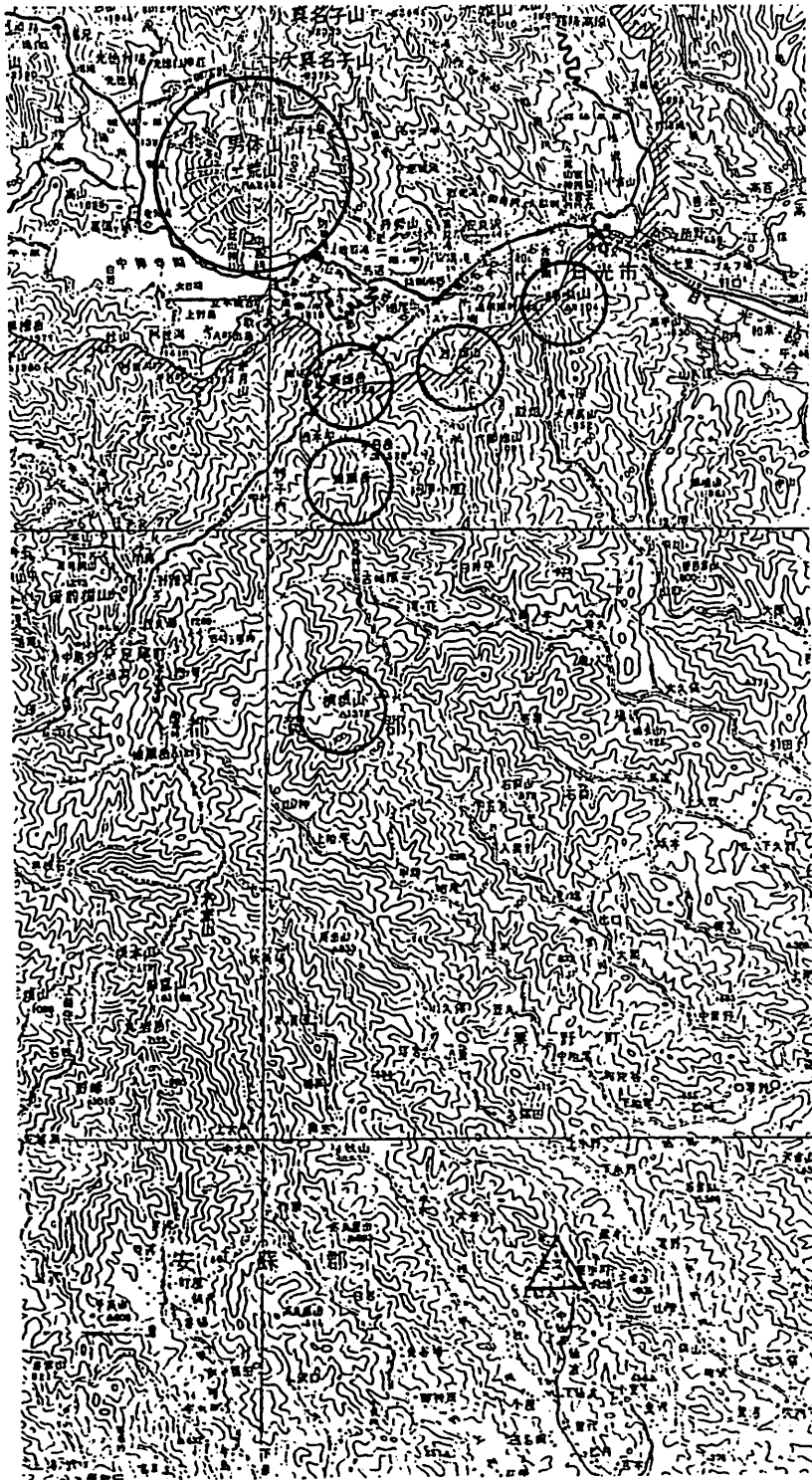
前にみた通り「山碑」と「日記」には記述に多くの違いがみられるが、大部分は「山碑」の叙述を「日記」が後世の信仰や資料・史料を混入粉飾したもので、これを除外し年記の誤りを補正すれば、勝道の生涯の大綱はほぼ同じである。このう

ち「日記」にある怪異出現は別にして、「山碑」に全くない部分は伊豆留（以下現在の地名に合せて出流・出流山とする）に関係する事蹟である。これをやはり「山碑」にない上野島止住や五大尊堂建立と同列に扱ってしまえばそれまでであるが、出流は中世の日光修験による入峰の起点であり、勝道山中修行の故事によるとその由来が明確であるため、出流に関して検討を加える必要がある。

出流の位置は第5図に示した。下方の△印が出流、小さい○は日光修験の両峰に関する山々、大きい○が男体山（補陀洛山）、その南側が中禅寺湖（南湖）である。

出流は足尾山地にあり現在栃木市に属しているが、葛生町と境を接する市域の北西縁に当たるところで、一帯には石灰岩が多量に埋蔵され大規模な採掘が行われている。勝道が止住したという洞窟はいま真言宗智山派別格本山出流山満願寺の奥の院になっており、絶壁の中腹にある洞窟の入り口に、長い角柱に支えられた舞台造りの堂が一字しづらえてある。絶壁の下方の水場には不動三尊が祀られ、修験の行場であったことを示している。勝道止住の洞窟は断面が心葉形の狭い鐘乳洞で、奥には台石に立つ石筍がある。石筍は古くから十一面観音立像と観ぜられ、勝道の父母が子授けを祈願したと「日記」にある像である。

寺伝では満願寺の開基が勝道、本堂安置の本尊は千手観音、像は勝道の縁でここに来山した空海の作ということになっている。寺伝による勝道の父母の名は「日記」と異っているが、父母の洞窟での祈願、勝道の止住、空海 come 山などこの寺の縁起はすべて日光山に結びつき、しかも「日記」をなぞっていることになる。縁起は「日記」の粉本と考えてよい。寺域では勝道の生きた奈良時代の遺跡・遺物が発見されておらず、勝道の事蹟はともかく、この時代の成立を実証することは極めて困難である。このことは「日記」の成立に関する逆の面の裏付けとなろう。



第 5 圖 出流山・日光山關係山岳位置圖

「日記」には出流に関連して大剣峰の名がしきりに出てくる。日光入山前に勝道が修行した山である。これは現在の横根山を指すと考えられており、日光修験の入峰は中世では出流からこの山に入る順路になっていた。近世の入峰でも日光山内から1日の行程で迂回し、この山から修行が開始されている。横根山が重視された理由は、「日記」に勝道がここで修行中「北の山に当りて四色の雲、常に空中にそびえたり。奇異の思をなし、経像を緞負し装を裂きて足を纏ひ、北方に向ひて尋ね求め、終に当山麓に至る。」(原漢文)とあるため、いわばこの山が補陀洛山開山の原点であり、山中抖擻の原点であったからにはほかならない。

出流から横根山への道は第5図に見る通り谷筋を北北西に向えばよく、粕尾の谷から山にかかるか、粕尾峠に出て西斜面を頂上につめればよい。この辺に立てば、眼前に前山の山列を圧して男体山がそそり立ち、背後に日光火山群の連峰を従えた大パノラマが展開する。諸峰を圧して屹立する男体山の姿は、ここからの眺望が最もすぐれている。「日記」には言外に、横根山のこうした立地が含まれているのではないかと思う。日光山地を抖擻する山中修行者ならば横根山からの景観は十分心得ていたはずであり、横根山と男体山を結びつけるため、別個の観音信仰の地であった出流山をまず横根山に結びつけ、さらに観音の聖地とされた男体山と横根山の結合を画策したものであろう。近世の入峰が出流に赴かず直接横根山に入るのは、勝道の事蹟としては横根山が主で、出流が従であったからにはほかならない。極言すれば出流はあっても無くてもよく、眼目は男体山の偉容を仰ぎながら山中修行へ入ることにあったと考えてよい。

勝道以後男体山への登頂行は続けられ、しばらくしてから周囲の山々への修行登山が始まり、恐らく山中修行の法式・儀礼も逐次固まりつつあったと思われるが、これは男体山を中心とする日光山地の限られた山の範囲にとどまっていたはずで、

このあと述べる日光山地の山頂遺跡が、このことを事実として裏付けている。横根山から地藏岳・葉師岳・三ノ宿山と経過してゆく山中修行の道、男体山と周囲の山々を外から、しかも間近に仰ぐ修行の道の発見は誰によってなされたかわからないが、この抖擻路の完成は勝道以後男体山を中心にしてきた山岳修行にとって画期的な出来事であった。この時期が恐らく平安時代末から鎌倉時代初期頃であり、両部峰行の体系が完成したのは鎌倉時代前期の頃であったように思う。承元4年(1210)に第23代日光山別当に補任され、その後約40年にわたり治山した弁寛は大峰で修行を積んだ修験者であり、日光山入峰の大法完成に力を尽したと伝えられる。「補陀洛山日記」はこのようない山の状態のもとに偽撰が進められたのではないだろうか。冬峰・華供峰の位置付けや法式・儀礼の大要は、すでに体系の完成していた他山からの移入であろうが、男体山を外側から奉拝する形の山中修行は日光山の修験によって移入前から実践されており、入峰体系の整備にあたって依拠すべき聖典として、勝道に仮託した「補陀洛山日記」が撰述されたものと考えられる。入峰の体系の完成によって教団として成立した日光修験が、このあと消滅に至るまでの長い期間にわたり峰行の典拠としたものは、空海撰の「二荒山碑」ではなく偽撰の「補陀洛山日記」であった理由はここにある。「補陀洛山日記」は偽書であるが、偽書でなければ果すことのできない役割を、十二分に果たしてみてもよいのではないだろうか。

2. 四季の峰行と日光山地の山岳信仰遺跡

「補陀洛山日記」に關係する入峰は四季の峰のうち冬・春・夏の3峰で、秋峰である五禅頂や日光山の根本修行である男体禅頂は、横根山を通過して行かないという点で、「日記」に深く関係していない。ただ「日記」が勝道の補陀洛山開山を説く以上、男体禅頂や五禅頂にもかかわりがある

が、これだけならば「二荒山碑」を修行の典拠とすることで事足りる。「日記」を偽撰する必要はないわけである。このことを逆にみれば、峰行は「山碑」によって位置づけられた修行と、「日記」によって位置づけられた修行のふたつに区分でき、年代的には「山碑」に位置づけられた修行が、「日記」による修行に先行するという可能性が生ずる。四季の峰は斉一に成立したのではなく、発生的にはいくつかに分けられるわけである。しかし「山碑」によるかぎり、勝道の登頂は補陀洛山—男体山に限られており、周囲の山に触れるところはない。勝道の原資料がこうなっていたはずで、彼は周囲の山には登頂しなかったとみるのが至当であろう。五禅頂の発生を「山碑」に求めることは解釈の問題であり、可能性の問題であって、史料そのものからは引き出すことができない。これを埋める資料が日光山地の諸峰に営まれた山岳信仰遺跡、特に山頂部の山頂祭祀遺跡とその出土遺物である。

山頂遺跡の形態は巨岩を対象にした磐座で、山頂にあるため巨岩の直下は絶壁か急斜面になっている。巨岩は群をなす場合が多く、遺物は岩と岩の間の岩隙か、岩の周囲の火山砂に埋納されている。遺物は祭祀が執行されたあと、投棄・埋納された奉養品が主体で、このほかに破損倒壊した堂、小祠の金具や堂への奉納品もここに投棄された。神仏に献げられた物品を処理する聖なる場所として、長い年月繰返し使用されてきたもので、どの山でも山頂の特定な場所に集中して納められるのが常態であるから、その場所はこの山の信仰が開始されて以来、祭祀品を納める聖なる個所であり続けてきたわけである。山頂遺跡はこうした性質の遺跡で、山岳信仰の内容を直接的に反映し、遺物による時代区分もかなり明確である。

山頂の祭祀遺跡と修験の峰行を直接関係させることはできないが、古くからの聖地でありしかも結界されている山々には、通常俗人の立ち入りは

禁ぜられており、山頂の祭祀執行には山の修行者が深くかかわっていたことは間違いない。この修行者は奈良時代には山林仏徒、平安時代には山臥・験者、鎌倉時代以降は修験者と呼ばれた人々で、この系列をさかのぼれば、仏教渡来以前の山の司祭者にたどりつくものであろう。

日光山地の山頂遺跡はいまのところ中禅寺湖北側の山列、表尾根のうち男体山とこの周囲の山々に限られている。すなわち男体山・女峰山・小真名子山・大真名子山・太郎山の5峰で、湖の南側の山列や横根山・薬師岳などを含む足尾山地の低い山々には、山頂遺跡が全く認められていない。この一事をもってしても、四季の峰と日光山地の山岳信仰の間の時間的なずれが、おおよそ理解できる。

山頂遺跡が営まれた5峰のうち、出土遺物が群を抜いて多く年代が非常に古いのは男体山で、全国的にも最高位に位置づけられている。遺物は性質によって3時期に区分される。第1期は古墳時代で出土量は極めて少ない。第2期は奈良・平安時代で多量の銅鏡、密教法具・仏具のほか銅印・錫杖頭などが入る。第3期は平安時代末・鎌倉時代初期から近世末までで、修験関係品の御正躰・三鈷柄剣・禅頂札などや埋経品・武器・武具・馬具・堂祠の飾金具類がある。

男体山に次いで遺跡が大きく遺物の量も多いのが太郎山で、年代の上限は平安時代末、埋経品を主体にして武器・飾金具・陶器類があり、年代の下限は近世である。女峰山と小真名子山は遺跡が小さく、遺物も少ない。年代の上限はやはり平安時代末で、下限は近世である。小真名子山と男体山の間位置する大真名子山は、山頂が壮大な巨石に覆われているものの遺物は極めて少ない。大部分は近世に属し、一部の陶片が中世の作品である。

以上を通観すると、日光山地の山頂遺跡は信仰の主峰である男体山が中心で、山頂での祭祀は古

墳時代に始まり近世末まで継続していたことが知られる。日光三山は男体山・女峰山・太郎山の3山であり、女峰山と太郎山への物品奉賽が古代末に開始されていて、三山信仰の成立時期がおおよそ見当づけられる。小真名子山は女峰山と太郎山の丁度中間に位置し、三山をめぐるためには必ず山頂を通過しなければならない。この山頂に2山と同じ時期の遺物が存在しても決して不思議ではなく、通過点であることを裏書きするように遺跡は極めて小さい。大真名子山に遺物が少なく、時期も新しい理由は分らない。様々に推考できるが、当為の解答はない。今後の課題である。

日光三山の2峰女峰山と太郎山への物品奉賽が古代末から中世初頭に開始されたことは、男体山頂遺跡の第3期の開始と符合し、極めて重要な事実である。男体山ではこの時期に山頂奉賽品の内容が一変し、山岳信仰の形態に重大な変化が生じたことを間接的に告げている。日光一山に体制上の大きな変化が生じた結果と受け取られるが、変化の重要部分には山岳修行者の集団組織化、日光修験の教団成立に関係があるとみてよいのではないだろうか。日光修験の成立ないしは成立への動きの具体的な表象が、奉賽品の転換であったと理解するわけである。

三山信仰の3山は、男体山を頂点とした逆三角形の位置に女峰山と太郎山がある。山岳修行者がこれらの山の山頂に物品の奉賽を行うようになるのは、男体山の奉賽品の変化と同一時期であり、物品の内容がほぼ一致していることから、同一思想によったものであると考えてよい。この時期は長く続いた男体山への一点集中型信仰から、山地の諸峰へ信仰が分散してゆく分散型信仰への転換の初期に当たっているように思う。主峰男体山に対する信仰は日光一山の山岳信仰の根幹であり、登頂祈願がのちの男体禅頂の祖形であることは論を俟たないが、専門修行者のみでなく一般凡俗も入山登頂が可能になると、修行者はここから離れ、独

自の行場を開拓してゆくことになる。修行の山には神格が必要であり、本地仏も特定される。必然的に山中修行の法式・儀礼が複雑化し、一山の定形が要求され、入峰の法が定めるといった経過をたどったはずである。発生的にみるならば、日光山地における山岳修行の形態は、のちにいう男体禅頂が最も古く、三峰五禅頂の中では、本来太郎山を含めていた秋の峰一五禅頂がこれに次ぐものであると思う。この原形は古代末・中世初頭にでき、のちに秋季の行事に固定され、儀式臭の濃い5組の入峰となったと考える。

三峰のうち冬峰と華供峰の両峰はこれに後続する時期に成立したと思うが、正確な年代は分らない。足尾山地を通過することで、三峰が「補陀洛山日記」と直接かかわり合うことは先に触れた。恐らく冬春の両峰が先行し、「日記」の撰述が後行したものであろう。夏峰の年代的な位置づけが残るが、これに関する史料が少なく、遺跡・遺物もまた微々たるものなので、他の峰との対比がかなりむづかしい。峰中の宿に掲げられていた板絵が夏峰に限定できる資料ならば、年代のある部分が特定でき、目安がつけやすい。板絵は正和2年(1314)を年記の初出とし、文保・正中と鎌倉時後期の年号が続く。14世紀前半に集中していることになる。別当弁覚の山務執行が13世紀前半であるから、約1世紀の遅れというわけで、この辺にひとつのめどがつけられるかもしれない。夏峰については後考を準備したい。

注

- 1) 『万葉集』巻第11にも黒髪山があり男体山に擬されるが、武田祐吉氏の注では奈良県佐保山の一部とする。同氏『万葉集』下巻 角川書店 昭和56年4月
- 2) 上記の史料は諸本によって異同があるので、本稿は益田宗氏の校訂による『日光市史』本を底本とした。

- 3) 新田英治『日光市史』上巻「中世」 日光市
昭和54年12月 弁覚の記事は『吾妻鏡』にみえる。
- 4) 中川光焯『日光市史』中巻「修験」 日光市
昭和54年12月
- 5) 「金剛山冬峰手鑑」『修験道史料集』1
名著出版 昭和58年6月 中川光焯 同上
- 6) 宮家準『修験道』 教育社 昭和53年9月
- 7) 「華供峰副大宿手日記」『修験道史料集』1
名著出版 昭和58年6月
柴田立史「日光山の入峰修行」『日光山と関東の修験道』 名著出版 昭和54年7月
中川光焯 同上
- 8) 「補陀洛山順峰入峰次第私記」『修験道史料集』1 名著出版 昭和58年6月
中川光焯「修験の道」『栃木の街道』 栃木県文化協会 昭和53年10月
- 9) 「禪頂先達秘密記」『修験道史料集』1
名著出版 昭和58年6月
中川光焯『日光市史』同上
- 10) 「大千度行法縁起」『修験道史料集』1
名著出版 昭和58年6月
中川光焯 同上
- 11) 中川光焯 同上
- 12) 『日光男体山』 日光二荒山神社
昭和38年11月
- 13) 「日光山満願寺勝成院堂社建立記」
『日光市史』史料編・古代 昭和61年3月
- 14) 植田孟縉「日光山志」『日光市史』史料編中巻 日光市 昭和61年3月
- 15) 「両部相承略伝記」『日光市史』史料編中巻 日光市 昭和61年3月
- 16) 益田宗『日光市史』上巻古代 日光市
昭和54年12月
- 17) 藤井萬喜太「日光山碑の一考察」
『歴史地理』73-5 昭和14年5月
- 18) 益田宗『日光市史』上巻古代 日光市
昭和54年12月